

## Y 2 海域（球磨川河口部）の問題点と原因・要因の考察

## 【有用二枚貝の減少】

## 現状の問題点の特定

球磨川河口域から宇城市に至る八代海奥部の干潟を中心としてアサリの漁獲が認められており、1985年には2,500tに達していた（図1）。本海域は河口干潟に属するため、大雨時の淡水流入による突発的なへい死、台風等による逸散が多く、豊凶の差が激しい海域で、5～10年周期でアサリ資源の増減がみられてきたが、2008年の梅雨時期の大雨によりアサリの大量へい死が見られて以降、資源の回復に至っていない。

## 要因の考察

資源の回復が見られない要因として、2008年に引き続いて発生した梅雨時期の大雨（九州北部豪雨）による影響に加え、近年はホトトギスガイの大量発生、ナルトビエイの来襲なども指摘されている。本海域のナルトビエイ群に関しては、有明海のナルトビエイ群に比較して、大型であることが報告されており、資源量の減少したアサリ母貝にとって、その捕食圧は無視できない。

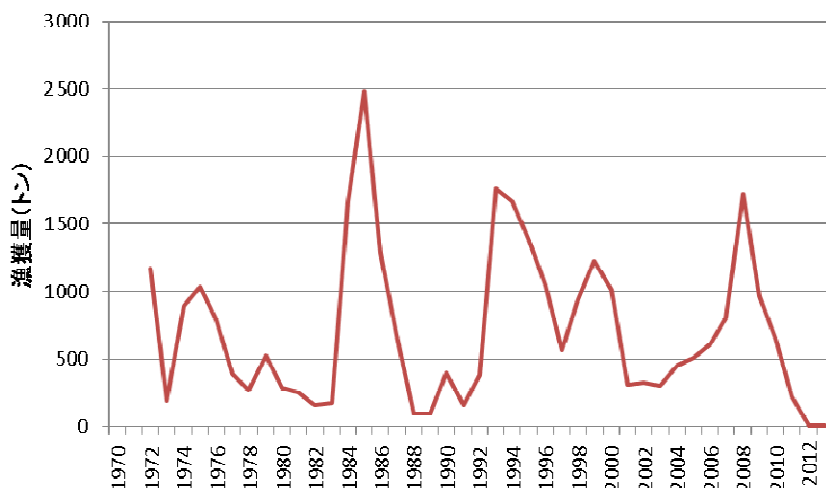


図1 八代海におけるアサリ漁獲量の推移（1970～2013年農林水産統計より）

## (まとめ)

アサリについて、2008年以降に漁獲量が減少している。このエリアの、浮遊幼生の供給量データはないものの、有明海のデータから類推すると、近年は相当低位で推移している可能性がある。

ナルトビエイによる食害について、八代海のデータはないものの、有明海のデータから類推すると、アサリの減少要因の1つとなっている可能性がある。

アサリ減少要因の1つとして、資源管理について、浮遊幼生や着底稚貝の量が低位で推移している中での資源管理方法が確立されていない。